

飛鳥宮跡活用検討委員会(第1回)の議事要旨

日 時：平成28年10月17日 13時30分～15時30分

場 所：明日香村中央公民館研修室

出 席：委員長 田辺 征夫

委 員 黒田 龍二、小林 牧、櫻井 敏雄、菅谷 文則、染川 香澄、
田島 公、寺西 和子、仲 隆裕、増井 正哉、松村 洋子、
森川 裕一

事務局 公園緑地課

関係課 奈良県 南部東部振興課、文化資源活用課、平城宮跡事業推進室
文化財保存課

明日香村 総合政策課、明日香村文化財課

議 事(主な意見)

- 史跡の実物大復元に携わったことがある。今は実物大の復元はしない方向で、自分は関わっていきたくて考えている。
- 自分が良いと思うことを来訪者がどう感じるかは、食い違うことが多い。一般の人に分かりやすいものとする必要がある。遺跡だけでなく、地域全体についてどのように活性化できるかも重要だ。
- 歴史を展示しようとする「モノ」の展示になってしまい、その背景などを展示するのは難しい。復元についても、仮設的なもの、流動性を持たせたもののほうがよいと思う。
- 経験上、学術的な内容を一般の人に理解してもらうためには、言葉や映像、図面よりも遺跡を復元するほうが伝えやすいと思う。飛鳥宮の掘立柱建築が復元される工程を見れば、往時の人々の気持ちを追体験することにもなる。
- 家族で来たいと思われるような場所にすることが大事。世界史の中での意味合いなど、歴史に詳しくない人にもわかりやすいものとするのが重要だと思う。一般の人の目線でわかりやすい展示方法を工夫する努力が必要だ。
- 重層的な飛鳥宮跡について、どの時代を対象に復元するか研究が必要。歴史の研究者を志望する学生の減少に危機感を持っている。若い研究者にとっての魅力向上につながる成果となるよう飛鳥宮跡の活用を考えたい。なお、2020年は日本書紀編纂1300年にあたる。
- 飛鳥宮跡には現在見えるものが何もないので、歴史に詳しくない人に説明するのは難しい。遺跡を復元すると、伝える内容が固定化してしまうので、バーチャルリアリティ技術を利用するのがよいと思う。VRならば新しい史料に合わせて修正もしやすい。まず興味を持ってもらいたい。
- 造園学では、活用があつての整備であり、地下の遺構を保存した上で、地表部分をどのように見せるかが考えられてきた。今回の議論は、既存メニューから選択するのではなく、改めて歴史を体感するためにどんなやり方があるかを考えることだと思う。学術的に検証しながらどのような明日香村の風景、景観を作っていくか目標をたてる必要がある。また、隣接する飛鳥京跡の苑池遺構と関

連付けた整備が必要。「活用」としては、ストーリーを決め多くの人に参加できる催しをやれば、色々な意見が集まり、研究の成果にもつながる。

- 飛鳥宮跡は明日香村の中心部に位置するため、景観にどのように調和させるか検証しながら整備しなければならない。歴史の中で変わってきた集落の風景や変わらない地形や山並みなどをどう生かすかが課題。来訪者の目線だけでなく、住民が地域の価値を再発見できるものとするのが重要。
- 「活用」の成否は人が集まるかどうかで決まる。多くの人に来てもらって、飛鳥の価値を理解してもらえるような活用の場になればよい。「飛鳥の宮から始まったもの」を活かした復元がよいのではないか。
- 古代史の舞台を保存しながらも、未来にどう残していくかを考えるべきで、その中心が飛鳥宮跡である。周辺には様々な規制、様々な景観が混在し、難しくはあるが、妥協や工夫を凝らして景観も文化財も保護するような「柔らかな整備」が必要だ。明日香村は歴史的風土の中で生きる地域であり、住民が誇りを持てるものとしたい。
- 一番理解されにくい遺跡を対象に一番重要な活用を考えなければならない。飛鳥宮跡の歴史的価値を押さえた上で、その表現方法を固定化しない「変化する遺跡整備」の方法を議論していかなければならない。
- 手法はいろいろあるが、観光だけでなく、住民が理解し誇りを持てる空間にしなければならない。
- 飛鳥宮跡に何を配置するのかは、何を伝えたいのかということと直接関連している。伝えたいことを学術的に検証し、価値を付加していくことが、今回の活用検討に求められている。